

服部宣之（はっとり・のぶゆき）先生



東海テレビ放送株式会社
制作局 東京制作部 プロデューサー

1976年5月11日生まれ（38歳）

東海テレビ 制作局 東京制作部 プロデューサー

大学在学中より、ホイチョイプロダクションズ・馬場康夫氏に師事。

映画「メッセンジャー」や、フジテレビ系全国ネットバラエティー「江角マキコの恋愛の科学」の制作に参加。

2000年東海テレビ入社。

深夜番組のAD、Dを経て、プロデューサーに。

主な担当番組

昼ドラ

「牡丹と薔薇」「偽りの花園」「インディゴの夜」「さくら心中」「赤い糸の女」「天使の代理人」「天国の恋」「碧の海」「ほっとけない魔女たち」など

SPドラマ

東海テレビ開局50周年記念スペシャルドラマ「長生き競争！」

文化庁芸術祭優秀賞（テレビ部門・ドラマの部）、ATP賞テレビグランプリ2009ドラマ部門優秀賞、日本民間放送連盟賞番組部門テレビドラマ番組優秀賞 受賞

開局50周年記念スペシャルドラマ「少年時代」 ほか

SP番組

「EXILE 夢のチカラ」

「EXILE ATSUSHI ライフ・イズ・ビューティフル～小さいのちの詩～」

ほか

《講義概要》

テレビプロデューサーとして、昼ドラを始め多くの番組プロデューサーを務める東海テレビ放送株式会社の服部宣之氏が、テレビの昔と今とこれからについて講義を行った。講義は、受講生からの事前の質問に対して、回答をする形で行われた。

まず、プロデューサーになるまでの経緯を簡潔に話し、混同されがちなディレクターとプロデューサーの違いについて説明した。担当したドラマを短編映像で紹介し、昼ドラから派生した舞台やキャスト陣のCDデビューについて触れ、ライブ・エンタテインメントによる時間・空間の共有について、今後も取り組みたいと述べた。

ドラマ・ドキュメンタリー・バラエティなど、365日様々な番組編成が行われている地上波放送は、様々なアウトプットの形を選択し、発信が可能である。しかし、視聴者のニーズや時代の空気感をつかみ、想いを共有することができなければ、失敗に繋がることもある。

テレビの歴史についても触れた。1953年の放送開始直後は、街頭に置かれたテレビに人々が集まり、大衆娯楽の頂点であった。生放送からVTR放送、アナログ放送からデジタル放送へと技術進歩し、誤差がありながらもテレビの評価基準となっている視聴率やコンプライアンスなど、テレビを取り巻く環境は大きく変化した。しかし、大衆娯楽の頂点であった頃と同様に“皆が観て楽しむもの”という、テレビの普遍性を維持するべきでもある。

テレビの今後についての質問に対しては、テレビとは24時間という限られた時間に、不動産のように付加価値をつけて提供するビジネスである。付加価値をつけるには、テレビを通じた時間・空間・想いなどの共有が必要となる。また現在、テレビはライブを重視しつつある。音楽番組は減少傾向にあるが、本来音楽はライブに向いており、今後生放送による番組をどう作り上げるかが、民放の鍵となる。最後に、「ブームをどう生み出しているのか」という質問に対し、著名なクリエイターの言葉を引用し、「時代の半歩先を行くのが売れる秘訣である」と話し、講義を終えた。

受講生からは、視聴率の誤差について同感する声が多く挙がった。また、若者のテレビ離れに対して、インターネットやSNSの活用などを挙げる声もあった。

